「黄金為地」③

本願寺派布教使・行信教校校長 天岸淨圓先生

『仏説阿弥陀経』の中に「黄金為地」という4文字のお言葉が出てまいります。「黄金を地とす」もしくは「黄金を地と為す」と読んでおります。

昔の人は、果たして良かったのか悪かったのかは問題なのですが、仏さまの見た目の世界というものを絵で表しました。日本で1番有名なのは「当麻曼荼羅」という絵です。特に中国で流行りました。今私たちがよく耳にしたり、興味の深い方は當麻寺へお参りくださったりしたお方もおられると思うのですが、今から1300～1400年前に美術で有名な中国の敦煌あたりでそういう絵が出来てきます。それがだんだんと掛け軸になって、巻いて収めることができるというので、あちこちへ広がっていきました。その中の1つが當麻寺へ来ています。

お経に説いてくださったことをみなさんにわかりやすくするために絵を描けば、色を付けます。「黄金を地と為す」と言っていますので、極楽の地面は金に描いているわけです。そうすると、極楽のイメージと言えば、金の地面に金の建物が建っていて、それで何もかもが金々満々…。なんか死んだら良い所へ行くというような感覚とそういう金々満々しているようなもののイメージとが1つになって、良い所やということになります。

ここからがその心が変わっていくということなのです。阿弥陀さまが踏んでいらっしゃる地面も私が踏んでいる地面も同じ地面です。山奥であるか浜辺であるかは違っても、私が踏んで生きさせていただいている地面も、仏さまが生きていらっしゃる大地も同じ大地です。でも、仏さまにとっては、その大地は黄金というふうな受け止め方をします。黄金というような下そのものです。だからいわゆる「もの」ですね。上の黄金は「感受」です。受け止めておられるということです。地面が金になるのではなく、地面を黄金と受け止めてられているということです。言ってみれば、下は土で、上は金です。

短絡的な話ですが、みなさんは土を貰って喜びますか？高校野球に出場された学生さんたちは甲子園の土を貰って喜びますが…。私たちは金と土とどっちを貰うと喜ぶかと言えば、金を貰ったら喜ぶけれども、土を貰っても何も思いやしませんね。なぜかと言えば、金はお金になるからです。

例えば、親から財産を相続するとします。同じ財産を相続するのでも、良い土地とつまらん土地とがあります。良い土地とつまらん土地ってどこで決まるかと言いますと、1坪なんぼで決まるわけです。1坪2千何百万っていう土地と1坪2万っていう土地とは、土地は土地で一緒です。なぜ良い土地を貰ったら喜ぶのかと言えば、良い土地はお金に換えたら値打ちのある土地だということです。つまらん土地は、お金に変わらない値打ちのない土地だと、こうなってしまいます。何が喜ばれているかと言えば、経済的な価値になるかならないか、良い意味で大きな影響を受けるか影響を受けることが出来ないかで、喜んでいるか喜んでいないか、良いか悪いかっていうことが変わってきますね。

しかし、阿弥陀さまもしくは仏さまの感受とは、「もの」を感じるわけです。「もの」を感じるという

ことは、土を黄金のように感じておられるということですね。土を金にして喜んでおられるのではなく、土なら土、地面なら地面、大地そのものを喜んでおられるのです。普通、我々は金・銀というものがやっぱり1番喜ぶ物でしょう。今の時代は銀を貰っても金より嫌ですね。そりゃ金に見合うほどの量を貰ったら良いけれども…。要するに何かと言えば、1番喜ぶものという例えでしょう。

阿弥陀さまがこの言葉で私たちに教えようとしてくださっているのは、大地は実は大地のままで、みんなが1番に喜ばなければならないほど喜ばしいものなのですよ、と私はそういうふうに受け止めて、地面の上で生活させてもらっていますと言うことです。みなさんどうですか？

まず地面を金のようにありがたいと思っていませんね。しかし、土地が無ければ生きる場所もないし、命の糧(かて)も実りません。無かったらどうにもならないものをどうでもいいものにして、逆に金があったら地面が無くても生きていられるのか、人間は金さえあったら何も無くても生きていけるのかっていうような「もの」の受け止め方にひっくり返っていませんか？

何もかも全部わかったような気持ちになって、私たちは1番大事に受け止めなければならない、あらゆるいのちの場が支えられている中で、お互いのいのち、全部のいのちは支えられて今があり、そういう中に生きさせてもらっていることそのものを感じる豊かさを感じることができません。経済的な価値が高いか低いかで物事を受け止め、それをより多く持ったことが豊かなことであり、それを失って少なくすることがつまらないことであるかのような1つの「もの」の受け止め方に凝り固まってしまっています。

そして、「もの」の考え方を豊かと貧しい、勝ったと負けた、幸せと不幸せというように2つに分けて、それを当たり前のようにして、時には思い上がり、時には僻(ひが)んで、そういう中に生きている世界、そういう世界を作り上げて、心が濁っているのです。ですから、先ほども言いましたように、地面を見ても地面に手を合わせるのではなく、地面を対象にして出入りするお金の貨価に手を合わせています。そういう所に、「もの」の見方の危うさがあります。それが実は私たちが普通と思っているものの見方です。

それを仏教用語では、「穢土(えど)」と呼びます。穢土ということに気がつかれたら、少しずつ清らかな方へ自分の意識がはたらくように、いわば方向を転換させてもらうことが教えを聞く、またはお浄土を願うということの私たちにとっての教えの意味だったのです。ですから、お浄土と言うのは、言葉は良くありませんが「死んだら生まれる所」というだけの意味ではなかったわけです。生きている私に、どういう「もの」の感じ方が大事かということを教えてゆくのです。

決して、経済的な「もの」がどうでも良いとは私も言うことはできません。私自身も土を貰うよりも…。経済的な部分も大きな問題ですけれども、決してそれだけではなく、大事な「もの」の受け止め方、価値観のあり方がもう1つあって、それを大切にしてほしいということが、浄土を説かれた意味なのです。

2020年7月1日「正宣寺真宗特別法座」より

YouTube「浄土真宗本願寺派 光寿山 正宣寺」チャンネルにて配信中